



Title	外国語学部学生の学力構造Ⅰ：大学成績と入試成績・高校成績の関係
Author(s)	大澤，春吉
Citation	大阪外国語大学学報. 1978, 40, p. 77-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

外国語学部学生の学力構造 I

——大学成績と入試成績・高校成績の関係——

大 澤 春 吉

THE STRUCTURE OF ACADEMIC ACHIEVEMENT AMONG UNIVERSITY STUDENTS OF FOREIGN STUDIES : I. BASIC ANALYSIS

HARUYOSHI OSAWA

Firstly, the reports of high school academic records and the matric results of 1,252 successful applicants to Osaka University of Foreign Studies during three years were statistically investigated. As to their high school performance, they were most superior in English, and least superior in Science and Physical Education. On the entrance examination, English scores are highest as well, followed by those of mathematics, World History and Japanese in order. The results of Mathematics and Japanese showed large individual differences.

Secondly, 193 students were followed up to determine the relation of their high school reports and matric performance to the subsequent four-years academic achievements. The former scores were converted into five factor scores, then correlated with the latter. The results showed; "High School General Achievement Factor" and "Japanese Achievement Factor" had low but significant correlations with most of the college achievement; "English Achievement Factor" had low but significant correlations with Foreign Languages under General Education; "World History Factor" and "Mathematics Achievement Factor" failed to find statistically significant correlations with college performance.

Finally, sex differences were investigated and in most of the variables examined female students were superior to male students.

問 題

今日の学歴偏重・受験教育過熱の社会的風潮に対し、大学入試方法の改善が叫ばれて久しい。各大学でそのための実態調査や研究が行われ、本学でも入学者選抜方法研究委員会の報告書がすでに^{1) 2)}2報を数えている。共通一次試験の実施が決定されたことによって、その妥当性や二次試験とのかねあいをめぐり、今後とも裏付け資料が蓄積されていく見通しである。

大学入試において、高等学校以下で達成された基礎学力を判定し、それぞれの大学・学部の専門分野に応じた基礎的能力・適性を判定して、入学者を選抜することが、高等専門教育としての大学教育の出発点であるが、選抜方法の妥当性は、入学後の教育効果との関連において、たえず検討されねばならない。

入学後の教育効果は、主として、学生が教育課程を履修していくなかで個々の担当教官によって判定されているが、そういった学力評価は単に単位認定のためのものにとどまってはならない。より適切な教育の目標・内容・方法への改善に役立てられるべきものであり、学習者としての学生にとっても、学習過程を自己評価しながら、将来、自らによって発展させる素地をつくることに役立てられなくてはならない。一般に大学教育における学力評価には、「評価の教育的意味の欠如」「方法の無自覚性」(正木、1956)⁴⁾が感じられるのが現状である。大学での成績を統計的に分析して、全体としての学力の傾向をとらえてみることは、教育対象の学力水準を把握したうえで適切な教育を行うために役立つとともに、大学での学力評価のあり方を吟味する意味でも必要なことではないかと思われる。

本報告は、以上のような問題を背景に、学力を構成すると考えられる要因についてのできるだけ多面的な情報を分析して、文科系でも比較的ユニークな分野である外国語学部の学生の学力構造を明らかにしていきたい。学力は教科の知識・技能にかぎらず、態度や興味を含む全人格的な枠組で考えたいが、今回は学業成績変数(高校調査書成績・入試成績・大学成績)のみを取りあげる。

I 基礎学力としての入試成績および高校成績の特徴

目 的

外国語学部における大学学業成績の基礎学力を構成しているとみられる入試および高校成績を統計的に分析し、その基礎学力の特徴の一端をとらえる。

方 法

調査対象 大阪外国語大学外国語学部(第一部)合格者のうち、外国語に英語Bを社会に世界史Bを選択し、調査各変数に欠損値のないものの1973年度395名、1974年度418名、1975年度439名の合計1,252名を対象とする。

調査変数 入試成績については、英語・数学・国語・世界史の4科目の得点、高校成績として出身高校調査書から国語・社会・数学・理科・英語・保健体育・芸術の7教科の評定値を用いた。

分析手続 入試成績の各変数について、各年度の世界史選択受験者(1973年度、1,940名; 1974年度2,201名; 1975年度2,269名)の平均と標準偏差¹⁾²⁾に基く標準スコア($Z = (X_i - \bar{X}) / SD$ ただし X_i は個人の得点、 $\bar{X}$ は受験群の平均、 SD は受験者群の標準偏差)の得点分布を求める。

高校調査書成績の各変数間について、評定値の差（ D —スコア）の平均と標準偏差を求め、平均値の差の検定を行う。

入試成績および高校調査書成績の各変数について、男女両群の間の分散および平均値の差の検定⁵⁾を行う。なお、これらの計算は京都大学大型計算機センターにおいて、FACOM M-190 版 SPSS を利用して行った。

結果と考察

1) 入試各科目における合格者の得点分布

Fig. 1. は、科目間の得点分布を比較するため、全受験者の科目毎の平均と標準偏差にもとづく標準スコアの累積度数分布（3 年度の平均）を示している。科目によって異なる平均と標準偏差を、標準スコアでは全受験者の平均を 0、標準偏差を 1 となるように標準化している。全受験者の分布はおおむね正規型をしているので、標準スコア -1.0 から 1.0 の間には受験者の約 68% が、 -1.0 以下と 1.0 以上にはそれぞれ約 16% ずつ占めているとみなされる。

科目別に合格者の得点分布をみると、受験者の平均以下の得点で合格している者は英語 5.9%、世界史 8.6% に対して、数学 14.9%、国語 15.7% と多い。合格者の 50 パーセンタイルでは、英語の標準スコアは 1.026 と一番高く、数学 0.918、世界史 0.896 がこれにつき、国語が 0.780 と最も低い。

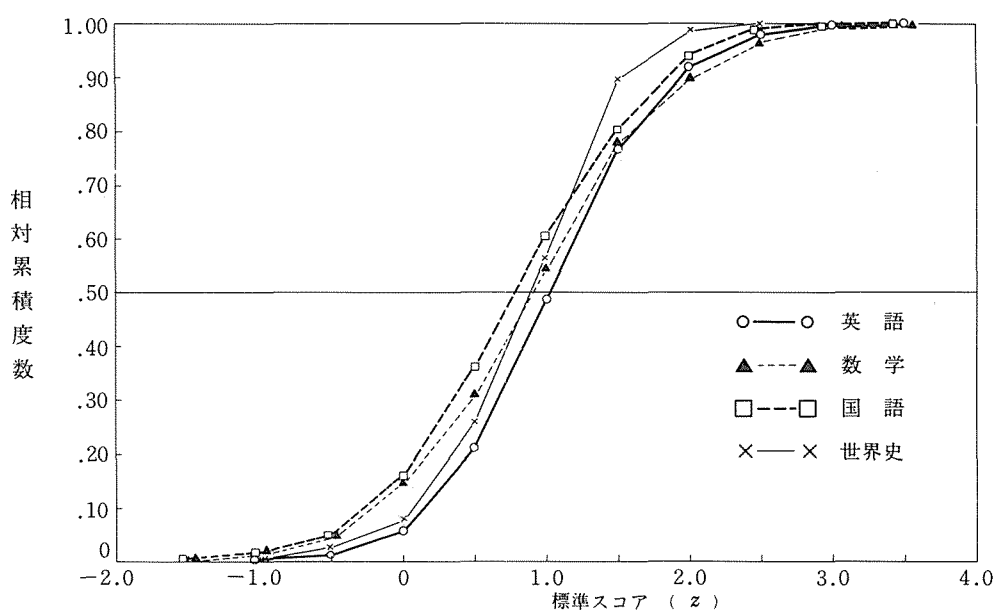


FIG. 1. 入学試験各科目の合格者得点分布

TABLE 1 は、標準スコアによる各科目・各年度合格者群の得点の平均 (M) と標準偏差 (SD) である。これら科目間・年度間の 2 要因について分散分析すると、科目間にのみ有意な差がみられ

($F=6.168$ $df=3,1240$ $p<.01$)、年度間には有意な差はなかった(TABLE 2)。科目間と年度間との交互作用にも有意差がないので、3年間を一緒にして科目毎の標準スコア平均を比較すると、高い方から英語、数学、世界史、国語の順になる。科目間の成績差の検定をすると、英語と数学 ($t=44.46$ $p<.01$)、数学と世界史 ($t=24.13$ $p<.01$)、世界史と国語 ($t=13.03$ $p<.01$) のいずれの間にも有意差がみとめられた。

TABLE 1 入試各科目の標準スコアによる得点の平均と標準偏差

変 数	1973年度(N=395)		1974年度(N=418)		1975年度(N=439)	
	M	SD	M	SD	M	SD
英 語	1.099	0.741	1.055	0.683	0.941	0.642
数 学	0.870	0.907	0.956	0.964	0.880	0.662
国 語	0.885	0.815	0.751	0.798	0.745	0.798
世界史	0.875	0.578	0.769	0.644	0.851	0.567

TABLE 2 TABLE 1 にもとづく分散分析

変動因	SS	df	MS	F
科 目 間	0.0986	3	0.0328	6.168 **
年 度 間	0.0124	2	0.0062	1.166
交互作用	0.0257	6	0.0042	—
誤 差	6.5934	1240	0.0053	

$N-1=1251$

** $p<.01$

2) 高校調査書各教科の成績

TABLE 3は、高校調査書における各教科の平均評定値を高い方から順に、2教科間の差(D-スコア)の平均と標準偏差をあらわしている。3ケ年を通して、各教科の相対的な成績の良しあしを比較すると、英語の成績が最も高く、これにつぐ国語・社会・数学・芸術との間には有意な差がある($p<.001$)。国語・社会・数学・芸術の間には顕著な差はないが、理科はこれらの教科より低く($p<.001$)、保健体育は理科よりさらに低い成績を示している($p<.01$)。

つぎに、男女各群にわけて、これらの成績順をみると、やはり両群とも英語が最も高く、理科・保健体育は相対的に低いが、女子は英語について国語が芸術・社会・数学などよりも高い成績を示していることが注目される(国語とそれにつぐ芸術との間で、1973年度 $t=5.45$ $df=157$)

TABLE 3 高等学校調査書各教科評定値間の差の平均と標準偏差

変 数	1973年度($df = 394$)			1974年度($df = 417$)			1975年度($df = 438$)		
	D-score			D-score			D-score		
	M	SD	t	M	SD	t	M	SD	t
英 語－国 語	0.33	0.58	11.06 ***	0.32	0.57	11.61 ***	0.38	0.57	14.18 ***
国 語－社 会	0.11	0.47	4.82 ***	0.13	0.50	5.16 ***	0.01	0.50	0.51
社 会－数 学	0.01	0.60	0.31	0.01	0.62	0.19	0.07	0.64	2.28 *
数 学－芸 術	0.04	0.79	1.05	0.12	0.83	2.88 **	-0.03	0.89	-0.82
芸 術－理 科	0.23	0.72	6.39 ***	0.14	0.74	3.73 ***	0.24	0.79	6.42 ***
理 科－保健体育	0.11	0.66	3.24 **	0.14	0.64	4.32 ***	0.10	0.66	3.17 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ $p < .001$; 1974年度 $t = 5.05$ $df = 174$ $p < .001$; 1975年度 $t = 2.26$ $df = 157$ $p < .05$).

TABLE 4は、入試各科目得点・高校調査書各教科評定値について、男女各群の間の平均の差およ

TABLE 4 入学試験成績および高校調査書成績における性差

変 数	1973年度 (N=237 男, 158 女)				1974年度 (N=243 男, 175 女)				1975年度 (N=281 男, 158 女)			
	D-score	SD	F	t	D-score	SD	F	t	D-score	SD	F	t
入 試 成 績	英 語	-4.92 20.14 19.17	1.10	-2.42 *	-4.40 19.25 20.45	1.13	-2.24	-0.68 16.54 17.57	1.13	-0.40		
	数 学	1.29 18.35 15.40	1.42 *	0.75	-2.25 16.01 16.29	1.04	-1.41	0.14 14.87 12.65	1.38 *	0.10		
	国 語	-5.61 8.71 8.30	1.10	-6.39 ***	-2.89 8.22 7.59	1.17	-3.66 ***	-2.96 7.80 8.13	1.08	-3.75 ***		
	世界史	-1.38 11.08 11.97	1.17	-1.18	1.67 10.02 10.38	1.07	1.66	0.91 10.71 10.33	1.07	0.86		
	総計点	-9.55 30.22 28.74	1.11	-3.14 **	-7.78 28.79 28.97	1.01	-2.72 **	-2.75 26.46 26.65	1.01	-1.04		
高 校 調 査 書 成 績	国 語	-0.47 0.58 0.48	1.47 *	-8.77 ***	-0.37 0.64 0.51	1.55 **	-6.64 ***	-0.61 0.60 0.54	1.25	-8.77 ***		
	社 会	-0.23 0.57 0.53	1.15	-4.01 ***	-0.11 0.61 0.53	1.35 *	-2.04 *	-0.15 0.59 0.60	1.01	-2.51 *		
	数 学	-0.12 0.63 0.65	1.04	-1.78	-0.09 0.67 0.64	1.10	-1.34	-0.03 0.70 0.68	1.04	-0.47		
	理 科	-0.21 0.58 0.65	1.25	-3.33 **	-0.18 0.60 0.62	1.05	-2.96 **	-0.15 0.63 0.66	1.10	-2.34 *		
	英 語	-0.24 0.64 0.44	2.12 *	-4.32 ***	-0.17 0.64 0.54	1.44 *	-2.96 **	-0.22 0.67 0.53	1.55 **	-3.71 ***		
	保健体育	-0.10 0.55 0.53	1.01	-1.87	-0.14 0.55 0.50	1.22	-2.63 **	-0.18 0.54 0.55	1.01	-3.35 **		
	芸 術	-0.22 0.64 0.63	1.01	-3.45 **	-0.34 0.63 0.62	1.04	-5.38 ***	-0.39 0.69 0.64	1.14	-5.82 ***		
	全教科	-0.20 0.46 0.43	1.14	-4.42 ***	-0.19 0.49 0.44	1.25	-4.11 ***	-0.22 0.47 0.49	1.09	-4.68 ***		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

SDの上段が男、下段が女

D-score, t の - は、女子群の方が高いことを示す。

び各群の標準偏差をあらわしている。入試・高校成績を通じて、有意な性差はすべて男子より女子の方が高い成績を示している。

入試成績では、国語に著しい性差がみられ、3ヶ年を通して女子の方が一貫して平均得点が高い ($p < .001$)。英語は年度により国語より小さい性差がみられ ($p < .05$)、数学・世界史には有意な性差はみとめられない。4科目の総計得点では、1973年度 9.5点、1974年度 7.8点と女子の平均得点が高いが ($p < .05$)、1975年度では有意差はない。入試成績での性差は減少していくようにもみえるが、今後の追跡調査をまたないとはいえない。

高校調査書成績では、全般的に女子群の方が男子群より良い成績を示し、国語をはじめ社会・理科・英語・芸術の5教科には3ヶ年を通して有意差がある ($p < .05$)。数学には有意な差はないが、全教科評定値平均では女子群の方が高い成績を示している ($p < .001$)。

II 大学学業成績と基礎学力との関係

目 的

外国語学部学生の学力構造を、高校成績・入試成績の分析から得られた基礎学力の因子的構造と大学学業成績との関連性から明らかにする。

方 法

調査対象 大阪外国語大学（第一部）に1972年度に入学し、1975年度に卒業した235名のうち、本学入学試験において外国語に英語Bを、また社会に世界史Bを選択した193名（男子106名、女子87名）を対象とする。

調査変数 大学学業成績については、次の10変数とする。専攻科目の①講義・演習、②実習第1・第2課程（第1・2学年履修）、③実習第3課程（第3・4学年履修）。④関連科目（各学科共通の専門教育科目）。一般教育科目の⑤人文科学、⑥社会科学、⑦自然科学。⑧外国語科目、⑨保健体育、⑩卒業論文。各変数の必要単位数は、それぞれ24・20・24・20・12・12・12・8・4・8単位である。成績は4単位の場合A（100～80点）を30点、B（79～70点）を20点、C（69～60点）を10点とし（2単位の場合はその2分の1の点数）、変数毎にその必要単位数まで成績のよい順にうめて、その平均値を求めた（小数第1位を四捨五入）。

入学試験成績については、英語・数学・国語・世界史の各下位問題の得点、16変数とする。

高校成績については、出身高校調査書の国語・社会・数学・理科・英語・保健体育の各教科評定値平均の6変数とする。

分析手続 まず、入試成績16変数と高校成績6変数のあわせて22変数の間の相関行列（ピアソンの偏差積率相関係数）にもとづく因子分析（主因子法→バリマックス回転）の因子負荷行列とデータ行列（入試成績・高校成績の22変数についての個人別標準スコア）を用いて、最小二乗法による因子スコアの推定を行ない、この因子スコアと大学学業成績10変数との相関行列（ピアソンの偏差積率相関係数）を求める。

また各因子スコアおよび大学学業成績各変数について、その平均と分散の変数間・男女グループ間の差の検定を行う。

なお、これらの計算は、京都大学大型計算機センターにおいてFACOM M-190版SPSSを利用した。

結果と考察

1) 基礎学力の因子構造

まず、因子スコアの推定を行った因子負荷行列をTABLE 5 に示し、その因子構造について考察す¹⁾

TABLE 5 バリマックス回転後の因子負荷行列 (N=1,676)

変 数		I	II	III	IV	V	h^2
入 試 成 績	1.英 語 I	.183	.255	.454 *	.217	.306 *	.446
	2.英 語 II	.097	.228	.418 *	.185	.293	.357
	3.英 語 III	.091	.246	.526 *	.253	.141	.431
	4.英 語 IV(1)	.102	.122	.629 *	.135	.208	.483
	5.英 語 IV(2)	.124	.139	.664 *	.155	.141	.520
	6.数 学 I	.136	.229	.169	.653 *	.183	.560
	7.数 学 II	.114	.158	.174	.545 *	.153	.390
	8.数 学 III	.073	.031	.089	.433 *	.127	.218
	9.数 学 IV	.120	.166	.150	.513 *	.071	.334
	10.国 語 I	.139	.071	.196	.209	.441 *	.302
	11.国 語 II	.124	.170	.175	.144	.556 *	.406
	12.国 語 III	.099	.097	.202	.157	.497 *	.332
	13.世界史 I	.071	.524 *	.103	.089	.097	.308
	14.世界史 II	.094	.764 *	.160	.192	.155	.679
	15.世界史 III	.112	.803 *	.177	.146	.109	.722
	16.世界史 IV	.135	.795 *	.193	.150	.062	.715
高 校 成 績	17.国 語	.794 *	.067	.085	.011	.415 *	.816
	18.社 会	.773 *	.254	.029	.019	.213	.709
	19.数 学	.746 *	.034	.113	.411 *	-.075	.746
	20.理 科	.825 *	.037	.067	.252	.101	.761
	21.英 語	.703 *	.108	.391 *	.047	-.032	.663
	22.保健体育	.494 *	.078	.064	.074	.084	.267
固 有 値		6.443	2.145	1.173	.807	.606	
寄 与 率(%)		31.3	11.3	7.4	6.1	5.1	61.3

因子負荷量.300以上を解釈の対象とし、*印を付した。文献1)より一部補足して転載。

る。因子負荷量は、この場合、各因子と各変数との相関関係つまり因子構造をあらわしている。

第I因子は、高校成績とくに主要5教科の成績と.7以上の高い因子負荷つまり相関関係にあり、入試各下位問題とはほとんど相関がない。このことから高校学力一般に共通して変動する因子と考えられるので、この因子を仮に「高校学力一般因子」とみなす。

第II因子は、入試世界史の下位問題と高い相関関係にあり、そのほかの変数とは.255以下の低い

相関か、ほとんど相関がないので、「世界史学力因子」と考えられる。なお、この因子は高校調査書成績の中では、社会とだけ低い相関を示し、ほかの教科とはほとんど相関がない。

第Ⅲ因子は、入学試験英語の各下位問題および高校調査書の英語とかなりの相関関係にあり、そのほかの変数とはほとんど相関がないので、「英語学力因子」とみなされる。

第Ⅳ因子は、入学試験数学の各下位問題および高校調査書数学とかなりの相関関係にあり、「数学学力因子」と考えられる。

第Ⅴ因子は、入試国語および高校調査書国語とかなりの相関関係にあるので、「国語学力因子」とみなすことにする。なお、この因子は入試英語問題Ⅰとも.3の相関を示している。

本学受験者（世界史選択）の基礎学力は、上述の「高校学力一般因子」「世界史学力因子」「英語学力因子」「数学学力因子」「国語学力因子」の5因子から構成されていると考えられる。これらの各因子と各変数との相関つまり因子構造は、世界史選択受験者の場合、異なった母集団（1973年度受験者群、 $N=1940$ ；1974年度受験者群、 $N=2201$ ；1975年度受験者群、 $N=2269$ ）についての分析結果と、因子の布置的不変性(configurational invariance)があり、また因子のおよその大きさとその順位も一定していることが確められている。²⁾

2) 基礎学力各因子と大学学業成績の関係

次に、これらの基礎学力各因子と大学学業成績との関連性を求めてみることにする。 TABLE 5

TABLE 6 大学学業成績と基礎学力各因子の因子スコアの平均、標準偏差および相関行列

変 数		各因子と大学成績との相関					大学成績	
		I	II	III	IV	V	M	SD
専攻	講義・演習	192 **	044	003	-040	273 ***	25.03	3.97
	実習12課程	159 *	016	148 *	-118	153 *	24.16	4.92
	実習3課程	187 **	-041	072	-022	214 **	24.56	6.10
関 連 科 目		326 ***	-042	-006	057	267 ***	24.29	4.35
一般教育	人 文 学 科	218 **	-103	-065	087	273 ***	20.23	5.41
	社 会 学 科	269 ***	-069	065	041	255 ***	21.89	4.77
	自 然 学 科	194 **	-161 *	049	006	168 **	20.62	5.10
外国語科目		211 **	-166 *	296 ***	-054	140 *	20.89	5.09
保 健 体 育		178 **	-132	138 *	103	036	23.53	5.13
卒 業 論 文		081	070	-005	-169 **	225 ***	23.52	6.62
因子スコア	M	.232	.501	.694	.586	.504		
	SD	1.011	.629	.676	.742	.700		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 相関係数は小数点を省略。

の因子負荷行列と個人毎の各変数の標準スコアを用いて、各個人が各因子をどれほど所有しているかという、各個人の因子スコアの推定をし、これと大学学業成績の各変数との相関を求める。

TABLE 6 は、因子スコアの推定値と大学学業成績10変数との相関行列、およびそれぞれの平均と標準偏差をあらわしている。各因子スコアと大学成績各変数との相関は、全般的に.4未満と低い。しかし、第Ⅰ因子と第Ⅴ因子は、大学成績各変数の多くと有意な相関関係にある。また第Ⅲ因子も大学成績変数の若干と有意な相関関係にある。第Ⅱ因子および第Ⅳ因子は、これらとほとんど相関がなく、若干の変数とは負の相関を示している。これらの関係を次に検討する。

まず第Ⅰ因子「高校学力一般因子」の因子スコアは、専門教育科目の関連科目との相関が.326と最も高く、人文科学・社会科学・外国語科目と.2以上の有意な相関がある。この因子が大学における一般的な基礎学力として大学成績にかかわっていることが示唆される。

つぎに、第Ⅴ因子「国語学力因子」の因子スコアは、一般教育の人文科学・社会科学、関連科目の講義・演習・実習第3課程、卒業論文と.2以上の有意な相関がある。この因子も、第Ⅰ因子と同様、大学の学業成績全般に基礎学力として影響していることが示唆される。

第Ⅲ因子「英語学力因子」の因子スコアは、外国語科目と.296の相関関係にあり、実習第1・2課程・保健体育と有意な相関を示すほかは、他の大学成績とはほとんど相関がない。この因子が外国語科目・実習第1・2課程と相関関係にあることは、大学入学までに学習された英語基礎学力がこれら語学関係の科目の学習に正の転移効果を及ぼすためと考えられる。しかし保健体育との有意な相関関係は、TABLE 6からはその説明の手掛りを見出せない。

専攻科目の実習と保健体育との関連性、これらと英語学力との関連性については、同じ調査対象にもとづく別の因子分析から明らかにされている。大学成績と入試成績・高校成績の各変数を一緒にして因子分析したところ、「技能学習の態度因子」と仮に解釈した大学の保健体育・専攻科目実習を中心に負荷する因子が見出され、その因子は、そこでの「英語学力因子」と近い関係にあることが指摘されている。³⁾

第Ⅱ因子「世界史学力因子」の因子スコアは、大学学業成績変数の全般とほとんど相関がなく、外国語科目と一般教育科目の自然科学との間に有意な負の相関を示している。第Ⅳ因子「数学学力因子」の因子スコアも、卒業論文と有意な負の相関関係にあるのを除いて、すべてほとんど相関がない。しかし、男女各群に分けて相関を求めると、男子では第Ⅱ因子「世界史学力因子」と専攻科目の講義・演習と、女子では第Ⅲ因子「数学学力因子」と保健体育との間に有意な相関関係がみられる。これら2因子と大学学業成績との関連性を究明するためには、大学学業成績の変数のとり方を工夫する必要があると思われる。

TABLE 7 は、これら大学学業成績と基礎学力因子との関連を、男女両群に分けてあらわしている。男女一致して有意な相関関係にあるのは、第Ⅰ因子「高校学力一般因子」と関連科目、第Ⅲ因子「英語学力因子」と外国語科目、第Ⅴ因子「国語学力因子」と人文科学の間であり、いずれも.2以上の相関を示している。これらの関係は、男女に分ける前のTABLE 6 でも、各因子内で最も高い相

関を示していることと一致している。

大学学業成績との関係で男女差の著しいのは、第Ⅰ因子と第Ⅴ因子である。第Ⅰ因子「高校学力一般因子」は大学学業成績の多くと男女いずれかが有意な相関関係にある。男子では、専攻科目の講義・演習、実習第1・2課程、実習第3課程、自然科学、外国語科目、保健体育と有意な相関を示す。女子では、これらとほとんど相関がなく、一般教育の人文科学・社会科学と有意な相関関係にある。男子の方が大学学業成績の広範囲と関連をもち、女子の方が比較的限定される傾向は、第Ⅴ因子の場合も同じである。第Ⅴ因子「国語学力因子」では、男女一致して有意な相関関係にある人文科学のほかは、男子では専攻科目の講義演習、関連科目、社会科学、卒業論文と比較的広い範囲の相関を示すが、女子ではほとんど相関がない。

TABLE 7 大学学業成績、およびこれと基礎学力各因子の因子スコアとの相関における性差

変数	各因子と大学成績との相関					大学成績の性差			
	I	II	III	IV	V	M	SD	F	t
専攻科目	講義・演習	188 *	182 *	042	-004	214 *	24.02	4.29	1.84 ** -4.12 ***
		033	097	-110	-100	151	26.24	3.16	
	実習12課程	161 *	141	214 *	-158	040	22.97	5.17	1.51 * -3.89 ***
		000	070	018	-057	102	25.60	4.20	
	実習3課程	235 **	130	108	-173 *	145	23.28	5.43	1.45 -3.30 **
		030	-056	011	144	144	26.13	6.53	
関連科目		261 **	097	038	122	176 *	22.77	4.51	1.82 ** -5.92 ***
		262 **	090	-149	-031	094	26.12	3.34	
一般教育	人文科学	077	009	-034	083	207 *	18.97	5.49	1.24 -3.67 ***
		304 **	-065	-152	106	188 *	21.76	4.93	
	社会科学	101	071	078	021	290 **	20.39	4.37	1.12 -5.15 ***
		340 ***	022	014	080	-045	23.72	4.62	
	自然科学	178 *	-073	134	-041	071	19.25	5.00	1.12 -4.28 ***
		064	-071	-102	083	064	22.28	4.73	
外国語科目		244 **	-028	330 ***	-152	118	19.74	4.78	1.16 -3.58 ***
		051	-163	247 *	065	-030	22.30	5.14	
保健体育		250 **	-021	199 *	007	-080	22.55	5.40	1.43 -3.01 **
		-059	-136	021	266 **	013	24.74	4.52	
卒業論文		107	131	-056	-152	322 ***	22.83	7.00	1.34 -1.61
		-029	094	057	-193 *	-009	24.37	6.04	

相関係数は小数点を省略。 相関係数, *M*, *SD*の上段が男、下段が女。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

TABLE 8 は、男女各群の基礎学力各因子の因子スコアの平均と標準偏差をあらわしている。基礎学力各因子における男女差は、大きい方から第Ⅴ因子「国語学力因子」(男<女)、第Ⅱ因子「世界史学力因子」(男>女)、第Ⅰ因子「高校学力一般因子」(男<女)の3因子にみられ、第Ⅲ因子「英語学力因子」と第Ⅳ因子「数学学力因子」には性差はない。

男子における因子スコアの平均と分散は、第Ⅰ因子「高校学力一般因子」では、全受験者群のそれらとほぼ一致しており、第Ⅴ因子「国語学力因子」でも、比較的低い平均(.274)と比較的大きい標準偏差(.700)を示している。こうした平均スコアの平均と分散あるいは大学学業成績における男女差(男<女、TABLE 7)が、上述の大学学業成績と基礎学力各因子との関係にみられる性差に影響していると考えられる。

TABLE 8 基礎学力各因子の因子得点における性差

変 数	M	SD	F	t
I (高校学力一般因子)	0.010 0.502	1.040 0.909	1.31	-3.45 **
II (世界史学力因子)	0.684 0.278	0.587 0.607		
III (英語学力因子)	0.661 0.733	0.700 0.647	1.17	-0.74
IV (数学学力因子)	0.594 0.577	0.765 0.716		
V (国語学力因子)	0.274 0.785	0.700 0.594	1.39	-5.40 ***

M, SDの上段が男、下段が女。

*** $p < .001$, ** $p < .01$

要 約

外国語学部学生の学力構造を明らかにするため、まず大阪外国語大学の1973、1974、1975の各年度入学試験の世界史選択合格者1,252名を対象として、入試各科目および高校調査書各教科の成績を統計的に分析し、大学での基礎学力の特徴を調べつぎのことがわかった。

1) 合格者の入試各科目間の成績順位は、高い方から英語、数学、世界史、国語の順となる。数学・国語は個人差が著しく、成績の低いものもかなり含まれている。また、国語には明らかな性差があり、3ヶ年を通して女子の方が一貫して平均得点が高い。英語は年度により国語より小さい性差がみられ(男子<女子)、数学・世界史には有意な性差はない。

2) 高校調査書成績では、英語がやはり最も高く、国語・社会・数学・芸術がこれに次ぎ、理科・保健体育の評定値が最も低い。また、数学を除く国語・社会・理科・英語・芸術の5教科に性差がみられ、一貫して女子の方が高い。この差は入試成績と同様、とくに国語に著しい。

つぎに、高校成績・入試成績と大学成績の関係をみるために1972年度入学－1975年度卒業の193名を対象に、高校・入試成績の因子分析（1972年度世界史選択受験者1,676名による）から得られた「高校学力一般因子」「世界史学力因子」「英語学力因子」「数学学力因子」「国語学力因子」の5基礎学力因子について、各因子の因子スコアの推定を行ない、これらと卒業論文を含む大学成績10変数との相関を求めた。その結果、

1) 「高校学力一般因子」「国語学力因子」「英語学力因子」の基礎学力3因子は大学成績と低いが統計的に有意な相関がある。「世界史学力因子」「数学学力因子」と大学成績との関連は明らかでない。

2) 「高校学力一般因子」は卒論を除く大学成績全般と関連しており、とくに、専門教育科目の「関連科目」、一般教育科目の「社会科学」と「人文科学」および「外国語科目」との相関が目立つ（.21～.32）。「国語学力因子」は保健体育を除く大学成績全般と関連しているが、とくに「人文科学」「社会科学」「関連科目」および専攻科目の「講義・演習」「実習第3課程」「卒論」と.20台の相関がある。「英語学力因子」と大学成績との関連はいっそう限定され、「外国語科目」(.30)「実習第1第2課程」「保健体育」とのみ関連している。

3) これらの因子（とくに「高校学力一般因子」）は、男子学生においては、専攻科目をはじめ大学でのかなり広範囲の成績と相関を示しているが、女子学生ではごく一部の成績との相関に限られる。

以上のように、文科系外国語学部学生らしい学力の特徴が、概括的にとらえられた。

文 献

- 1) 大阪外国語大学入学者選抜方法研究委員会 1976 入学者選抜方法研究委員会調査報告書（昭和50年度）
- 2) 大阪外国語大学入学者選抜方法研究委員会 1977 入学者選抜方法研究委員会調査報告書（昭和51年度）
- 3) 大澤春吉 1977 大学における外国語学力の分析（1）—大学成績・入試成績・高校成績の相関的分析— 日本教育心理学会第19回総会発表論文集 Pp. 786－787.
- 4) 正木正 1956 教育心理学序説 同学社
- 5) 三宅一郎・山本嘉一郎 1976 SPSS 統計パッケージ I 基礎編 東洋経済新報社